コミュニケーション的行為の理論的考察③

——エスノメソドロジーの視座から——

塩 﨑 紀 子

I 会話をめぐる言説

先般の私の論文「コミュニケーション的行為の理論的考察②」[1)]の終りで言及した「性差別のエスノメソドロジー——対面的コミュニケーション状況における権力装置」[2)]の検討から始めたい。ここで，分析者たちは，H・サックスら (Harvey Sacks, et al) が明らかにした会話の組織化における基本的モデルのひとつである「発話の順番取りシステム」を基軸に，実際の会話ではそれがどのように達成されるか，或いは変容するかを分析している。分析者たちの企図は明確である。〈いま——ここ〉のコミュニケーションにおいて，当事者がどのような権力作用[3)]にとらわれているの

1) 塩﨑紀子 「コミュニケーション的行為の理論的考察②——エスノメソドロジーの視座から」『講座日本語教育第 32 分冊』 1997 年所収

2) 江原由美子，好井裕明，山崎敬一 「性差別のエスノメソドロジー——対面的コミュニケーション状況における権力装置」『おんなと日本語』有信堂 1993 年所収。分析の資料は，1983 年 5 月 30 日，6 月 1 日の両日に，都内の 3 つの大学に所属する学部学生男女各 16 名を 2 名ずつ相手を変えて計 32 の組を作り，男性同士ペア 10 組，女性同士ペア 10 組，男女ペア 12 組で，第 1 日目は「大学でのサークル活動」，2 日目は「女性問題」のテーマで，各 30 分自由会話を行わせ，その模様をテープレコーダーで録音したものをトランスクリプトに起こしたものである。

3) 「権力作用」については以下を参照。山田富秋，好井裕明 『排除と差別のエスノメソドロジー』新曜社 1991 年。なお，「権力作用」ということばは江原由美子の造語である。江原由美子 『フェミニズムと権力作用』勁草書房 1988 年

かを，当事者になりかわって相対化することである。端的に言えば，この分析でターゲットになっている権力作用とは，男女学生らが意識せずに行使し，服従しているジェンダーカテゴリーの執行と取り込みであり，それを会話の文脈から顕在化することと言ってよい。分析結果の要点を略述しておこう。もとより，記述理論であるエスノメソドロジーの記述や語り口を整理することは，エスノメソドロジー的実践からの逸脱に当たるのだが，権力作用が実現される言語現象解読作業の一端を紹介する目的から，敢えてポイントを抽出したい。まず，「質問——応答連鎖」では，男女の使うテクニックに非対称性が見られるということだ。男性が，自分の本当に話したい話題に持ち込むためにする構造化された質問＝前振り質問を，「会話誘導のテクニック」として多く用いるのに対し，女性は会話の円滑な進行を促すためにプラスに働く「一種の支持作用」としての質問をしていることが多い。あいづち，うなずきに関しては，女性が相手の陳述を支持する作業として用いているのに対して，男性が行うあいづちは「一応，話は聞いていることを示しているが，実際のところ，彼女が展開するトピックにはほとんど興味がないことを相手の女性に伝える働き」を持つ「マイナスに機能する」非支持作業として用いており，同じように非支持作業である不自然な沈黙や割り込み現象についても，男性に多く見られたと報告している。不自然な沈黙は，「女性が展開する話題への関心の欠如の表明」であったり，より積極的な「発話の中止要請」として，「男性が女性に対して典型的に」行うものであり，不自然な割り込みは，ふつうの会話状況なら自然に交代される発話の順番取りにおける，「発話権の実力行使」であり，相手の次の話や行為をも支配する「会話組織化にとってゆゆしき権力装置」となる。この種の割り込みは男性が女性の発話に対して行う場合が圧倒的に多かったと分析者たちは言う。

また，エスノメソドロジーの実践者である好井裕明は大学の同僚からの依頼により，女性問題をテーマに大学で行われた学生討論会を分析している[4)]。議論のレベルでは，女子学生の主張の方がはるかに説得力を持ち正

鵠を射ているにもかかわらず，全体的に彼女らが負けている印象を受けるのは何故かを，エスノメソドロジーの視点から説きほぐしてもらいたいというのが依頼の内容であった。分析をここで再述することは避けるが，「あるディスコース空間で女性たちが〈からかわれ〉〈さらされていく〉現実の様相」の具体的で精緻な解読は説得力のある洞察に富み，読む者を状況へと誘う。記述と解釈の相乗作用で読む者は状況に情緒的な次元で取り込まれていく。情緒的に揺さぶられて，読む者は自らの経験の層へと解釈枠組みを敷衍する。ここでは，好井の記述の要約の代わりに，その記述に触発された私の解釈を記しておきたい。好井の解釈と重なるものでもあるので，許されるだろう。すなわち，経験と自己の遭遇し得る差別的状況を正面に据え，議論を深めようとする女性たちに対して，分の悪くなった男性たちは，まともな議論を避け，からかいや揶揄を随時女性たちに浴びせることで問題の核心をずらし，また，笑いを聴衆と共有することで議論空間に男性中心的に構成されている支配文化の網目をはりめぐらそうとする。からかいや揶揄は硬直的に見える議論空間に出来事性を持ち込むことで空間を活性化させる[5]。男性たちは，「見られてはいるが，気づかれてはいない」支配文化の自明性に臆面もなく立脚しつつ，自明性を巧みに操ったからかいや揶揄により，女性が問題としたい性差別現象の位相をずらし，かつ，性差別に憤る女性たちの怒りを戯画化することによって，言説そのものの価値剥奪を行う。からかいや揶揄は自己に有利なように状況を変質させるための武器となり，聴衆の笑いは，女性たちを孤立化させ，包囲していく後方支援となる。意識的であれ，無意識的であれ，聴衆は軽口にのることで，男性たちのよってたつ支配文化を容認し男性たちと共犯関係を結んだ存在として状況に呈示されるからである。そこに，慣習化され

4) 好井裕明「からかわれ，さらされる『身体』と『論理』」『現代思想』青土社　1997年　vol. 25-2 所収。討論は男性司会者を中心にして，男女各3名が両サイドに座り，聴衆に向けて自由討議の形式で70分ほど行われた。

5) 構造と出来事については，以下を参照。エドガール・モラン「できごと——スフィンクス」『現代思想』青土社　1976年6月号　vol. 4, No. 6 所収

た議事進行の形をかりて，女性にダブルバインドをしかける司会者がいれば，もはや女性たちにできることは開き直るぐらいのことしかない。議論のこういう進み行きは，「性差別」や「従軍慰安婦」などをテーマとするテレビ討論でもよく見られる。ほとんど例外なく，対立に終始するその模様は，テレビのディレクターにとっては議論などどうでもよく，議論空間が構成され変質していく過程を継子いじめドラマとして見せるのが狙いなのかもしれないと思わせるほどお茶の間番組化している。

差別現象に対して，エスノメソドロジーは直截的な差別発言の応酬を図式化して見取ることを目的とするものではない。「そのように仕向ける推論過程の組織化のしかた」が探究されるのである。差別と排除の社会現象にエスノメソドロジーを方法論的な接近手段として用い，その解読を試みるエスノメソドロジストたちがいる。彼らは，日常的な会話の全過程を通じてやりとりされる，価値剥奪と価値付与を産出する言説のメカニズム＝権力作用を暴き出すだけではない。状況に分析者自身を巻き込むことにより，問題に対する分析者自身の立場をも問い直す。山田富秋[6]が言及しているマクハウル (McHoul) に従って，この立場を批判的エスノメソドロジーと呼んでおこう。批判的エスノメソドロジストたちが行う会話分析は，発動される権力作用の具現的な形である会話と分析者の身体とを切り結ぶ，すぐれて政治的な社会運動と言えるものである。批判的エスノメソドロジーに限らず，エスノメソドロジーの創始から現在に到るまで，その本質を貫くものは，相互行為の場において，「現象が埋め込まれている文脈」を掘り起こし，そこに交差する権力作用を明示化してみせることである。「エスノメソドロジーを歴史的に概観すれば，エスノメソドロジーの

6) 山田富秋 「アイデンティティ管理のエスノメソドロジー」栗原彬編『講座差別の社会学 1　差別の社会理論』弘文堂　1996 年所収。また，批判的エスノメソドロジーと同様の姿勢をもつラディカルリフレクシビティについては，以下を参照。好井裕明 「螺旋運動としてのエスノメソドロジー――“生きられたフィールドワーク”のラディカルな方法として――」『札幌学院大学社会情報学部紀要』1994 年 3 月　vol. 3, No. 2 所収

努力はどうやって自明性を批判するかということにつきる」[7] のである。

ここで，エスノメソドロジーが今後切り開くであろう企てについて，私なりに展望しておきたい。それは，エスノメソドロジーの理論や分析を読むにつけ感じていたある疑念でもあり，いまだ十分とはいえない理論化への私自身への挑発を含む，期待でもある。

まず，第1に，相互行為の〈いま――ここ〉の状況に集約される時間的，心理的な重層性への更なる接近方法が求められる点である。以前，プラットホームで電車待ちをしていた男性が，かばんをまたいだ若い男を，線路に突き落とすという事件があった。男性は「ばかにされたと感じた」からだと語った。私には男性の内面に鬱積された日常的な「ばかにされている」という実感が臨界点に達していた時の，状況突破的な行為だと思われた。若い男性のかばんをまたぐ行為が，男性の経験したであろう様々な「存在の軽視」を内包する言説や状況と結びつき，一挙に忍耐を突き破らせたのであろう。「ばかにされている」実感はこの男性の身体に取り込まれた状況解釈の集積がもたらすものである。つまり，この男性はリアリティを解釈したのである。また，G・ベイトソン (Bateson) が精神分裂病を引き起こす言語的な病因として挙げたダブル・バインドも，人間の身体に集積された矛盾する言説の層に立ち入らなければ，見えてこない。〈いま――ここ〉はまさしくアクチュアルな状況ではあるが，ひとりひとりの状況解釈のアクチュアリティーは「履歴現象」(＝ヒステリシス)[8] でもあるのだ。録音や録画のトランスクリプション化では拾えないこうした情報の蓄積過程をどうやって資料化するのか[9]。さらには，「現世的推論」はこういうアクチュアリティーのどこまでを明示化できるのか。身体論が方法論的に取り込まれなければならないだろうし，M・フーコーの言う集蔵体(＝アルシーブ archive)[10] を検討する必要があろう。

---

7) 山田富秋　同上論文。

8) Jean-Paul Sartre, *Question de méthode* 1960 [邦訳] J. P. サルトル 『方法の問題』 平井啓之訳　サルトル全集第25巻　人文書院　1962年

第2点は表象の問題である。トランスクリプションを分析する記述はメタ言語の問題に不可避的に遭遇する。そして，メタ言語は直接的な言語現象の構成/再構成であるが故に，分析者はその分析の記述を，表象，とりわけ分析者に受肉化された規範とシステムの表象から，どのように〈いま――ここ〉の「せめぎ合う現実」に立ちあげていくかという困難な問題に直面する。言表と表象の検討と方法論的突破を考えなければならないだろう。

第3点はエスノメソドロジー，特にH・サックスの言及した「カテゴリーの自己執行」という概念から導かれる社会運動(論)としてのエスノメソドロジーである[11]。「コミュニケーション的行為の理論的考察②」でもふれたが，サックスの『ホット・ロッダー』[12] で分析された支配的な文化

---

9) マイケル・モアマンはトランスクリプション化できない情報を重視し，民俗誌における「話の文化」を「深い次元で改める必要」を説いている。「(システムを中心とするモデルでは)言わずにすまされたこと，言うことのできなかったことなどが省みられる余地はほとんどない」のであって，「しばしば世界をこえて不思議にもわれわれをひとつにつなぎ止める，共通の焦点や感情をもったコミュニオンといったものの入り込む余地はどこにもないのである」 マイケル・モアマン 「会話分析とともに――ある民俗誌家の自伝」藤田隆則訳 谷泰編『文化を読む』人文書院 1991年所収。また，皆川満寿美らは障害者の共同作業所で収録した資料のトランスクリプション化にあたり，メンバー間では意味を持つが部外者にはことばとして理解できない「音現象」や，ちょっとした身体動作をどのように，またどこまで資料化できるものなのかを自問している。皆川満寿美 『ホームルーム(「共同作業所」における)：トランスクリプト，微視的権力状況における会話分析』平成2～4年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書(研究代表者江原由美子)

10) Michel Foucault, *L'archéologie du savoir*, 1969 [邦訳] ミシェル・フーコー 『知の考古学』中村雄二郎訳 河出書房新社 1970年

11) 日本において，この文脈でエスノメソドロジーの実践が行われたものとしては以下を参照。好井裕明編 『エスノメソドロジーの現実――せめぎあう〈生〉と〈常〉』世界思想社 1992年

12) Harvey Sacks, "Hotrodder: A Revolutionary Category" in G. Psathas (ed.) *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, Irvington Publisher, 1979, pp. 23–53 [邦訳] H・サックス 「ホットロッダー」山田富秋，好井裕明，山崎敬一編訳『エスノメソドロジー――社会学的思考の解体』せりか書房 1987年所収

にうまくおさめられることを拒否し，「ティーンエイジャー」ではなく，「ホット・ロッダー」としてのカテゴリー化をみずから行った若者たちの事件は，アイデンティティの自己管理という地平で再び解読されなければならないだろう。その核心は，個人が全面包囲された閉塞的な管理社会に対し，ラディカル社会学が提起するオルターナティブであり，なおかつ，その実践はアイデンティティ管理の現状を突破する運動論に展開できると確信する。エスノメソドロジーの実践が熟練したエスノメソドロジストの特権的な営みでないことは言うまでもない。サックスらが，素人が日常的に行うエスノメソドロジーの実践は社会学者の実践と同等に重要なものだと看破したのと同じ意味で，アイデンティティの自己執行を行おうとする「ふつうの人々」の営みは，サックスが共感的に洞察した「ひとつの革命」ほどに重要な社会的意味を持つと言えよう。その意味で，それは，アイデンティティの自己管理を阻む「安定的な支配文化」に対して，ひとりひとりが相互行為の具体的な場で，アイデンティティを確保する社会運動と言えるのである[13)]。

II　日本語学における会話分析

前節では，エスノメソドロジーの展開と展望を，批判的エスノメソドロジーに測鉛を降ろしてみてきたが，ここで，日本語学における会話分析にふれておきたい。会話分析というと参照される泉子・K・メイナードの『会話分析』[14)] は，談話の対照研究の確立をめざし，その理論化と分析方法，及び分析をおさめたもので，日本語学においては会話分析の先駆けとなった書である。会話分析と関連領域の先行研究を理論的に概観しなが

13)「民族的」アイデンティティの自己執行を行った「ろう文化宣言」と，「水俣病患者」のカテゴリーをめぐってアイデンティティの自己執行を行った緒方正人がとりわけ注目される。木村晴美，市田泰弘 「ろう文化宣言」『現代思想』青土社 1996 年 4 月臨時増刊号 vol. 24-05 所収。栗原彬 「差別の社会理論のために」栗原彬編『講座差別の社会学 1　差別の社会理論』弘文堂　1996 年所収

14) 泉子・K・メイナード 『会話分析』くろしお出版　1993 年

ら，メイナードは会話分析を行う学問的な問題意識と研究枠組みを「自己コンテクスト化」という基本概念に沿って収斂し，議論を進めていく。自己コンテクスト化は，メイナードによれば，「話者がコンテクスト情報をもとに会話表現を選ぶプロセス」として定義されているが，相互行為において「自己」がどのように立ち現れ，また記述されるのか，「自己」についての検討と定義がないので，その概念は非常に曖昧なものとなっている。その「自己」はただ単なる発言する人をさすのか，あるいは現象学でいう「語る主体」や「間主観性」の問題なのか。定義が曖昧なまま「各論」以降で「自己コンテクスト化」に即した分析が展開される。たとえば，日本語の日常会話は「あいづち表現を通しての自己コンテクスト化に敏感であり，この意味で英語より自己コンテクスト化の度合いの強いコミュニケーションのスタイルになっているということである」(第8章)というような結論である。また，この概念が，会話の日米比較対照分析に援用されるときには(第11章)「『自己コンテクスト化』の強弱」という言い方になる。「自己コンテクスト化＝プロセス」の「度合いが強い」とはどういうことなのか。混乱の原因を端的に言うと，この一連の議論では，自己コンテクスト化の概念が分裂しているのである。すなわち，定義にあった「会話表現を選ぶプロセス」から，E. T. ホールの言う「相互作用のコンテクスト度」という標識[15] へと位相の移動を起こしているのだ。ホールの言う「ハイ・コンテクスト」とは，受け手とセッティングの中にあらかじめ情報がプログラム化してあり，伝達されるメッセージの中には最小の情報しかない相互作用のことであり，「ロー・コンテクスト」とはその逆のことである。メイナードの先の結論も，ホールの「ハイ・コンテクスト」を引照して，はじめて了解が可能となる。

さらに言えば，理論志向，実証志向の強いこの本は，会話分析をエスノメソドロジーの会話分析から書き起こしているが，サックスの名を出して

15) Edward T. Hall, *Beyond Culture*, Anchor Press, 1976 [邦訳] E. T. ホール 『文化を超えて』岩田慶治，谷泰訳 TBS ブリタニカ 1979年

おきながら，何故こうなるのかというのが率直な感想だ。エスノメソドロジー創設時の伝統的な社会学に対するラディカルな異議申し立てには言及せず，サックスについても会話分析の装置のみが紹介されているにすぎない。こういう紹介のされ方はエスノメソドロジーには不当であろう。会話分析の系統発生的な面を理論的に概観し整理するという目的から，省略されたのかもしれないが，フリー・スピーチ・ムーブメントに関わったサックスが会話分析を日常世界のリアリティ構成に接近する方法として創始したという点にすら触れられていない。実証化，客観化に対するエスノメソドロジーの徹底的な批判を視野に含まずに構築される記述の方法論は，もはや「せめぎあう現実」とは何の接点も見いだせないものとなった。

また，現在，発表される会話分析にはある種の歴史文化主義ともいえる方向が散見される。ことばのやりとりに特徴的な言語現象を構造的に検討するだけでは物足りなくなるのかもしれないが，会話分析で得られた知見を社会や文化などの大きな物語と結ぶような議論には大きな陥穽のあることを今一度認識するべきだろう。たとえば，やはり，メイナードの『会話分析』のエピローグで，「日本語会話分析を通して得られた日本語の特徴は，やはり日本の社会，文化，思考方法などとの関連で理解されなければならない」として展開される議論は唐突で牽強であり，その文脈で登場する和辻哲郎，森有正らは，何故彼らの思想が「日本の社会，文化，思考方法」を説明するものとして援用されるのか，論理的・媒介的な証明の手続きを欠いて，説得力をもたない。同様に，何故，ヴィゴツキーの「内言語」の考え方に沿っていけば，「言語の特質だけでなく，人と人との接触のしかたの特徴，例えば会話管理のストラテジーも『内在化』されると考えることができる」のか，わからない[16)]。はっきり言って，私には引用される思想(の切れ端)とメイナードの議論の内容がどういう論理的関係を持つのか，よく理解できない。たとえば，メイナードの引く和辻の「間柄」は，「男女」「親子」を含む「家」に始まるのだが，それは家父長に率いられた非対称的な「間柄」であり，しかも，情緒的な「距てなき結合」とし

て構想されたもので，この「家」は「郷土」を経て，絶対的な帰一の対象としての天皇制「国家」へと，同心円状に吸収されていく。つまり，「間柄」は，この同心円が大東亜共栄圏にまで拡大していく論理を含んだものなのである。「間柄」の持つ，こういうきわめて政治的な意味合いを捨象して，日本語の会話の特徴と関連づけようとするのは，いかにも恣意的と言わざるをえない[17]。

私は，日本語学での会話分析や対照会話分析の成果は，まず，日本語教育においてこそ，存分に生かされるのではないかと思う。メイナードも述べている通り，「日本語教育の重要性が増す中で我々は各言語の日常会話の諸相を理解してはじめて有効な日本語会話の教育が可能になる」からである。教科書を中心とする教材開発や教授法研究では，検討されるべき課題がいまだ数多くある。日本語教科書に載っている過度に人工的な「会話」に対する，本格的な批判，検討もいまだ十分に行われていないのが現状なのである[18]。言語表現が「その言語の話される人と人との間つまり社会において考察されなければならない」のはその通りだし，その考察が学

16) メイナードは，ヴィゴツキーに言及して「内面化した言語もその習得過程で経験した社会の人間関係をそのまま反映している」と言うが，ヴィゴツキー自身は決して「内言」をそのようには捉えていない。「内言」は社会的現実の直接的な反映ではなく，社会関係の抽象化と一般化が行われた特殊な形式の反映なのである。メイナードは「内言」をあたかも現実世界の直接的な写像であるかのように解釈する故に，「会話管理のストラテジーも内在化することができる」などと結ぶのであろう。ヴィゴツキー解釈はもとより，結論の導き方に論理的な飛躍があり過ぎるのだ。ヴィゴツキー『思考と言語』上・下 柴田義松訳 明治図書 1969年参照

17) 和辻哲郎『風土——人間学的考察』岩波書店 1979年参照

18) 堀口純子は初，中級段階の日本語教科書における人工的な「会話」を「会話のストラテジー」の観点から検証している（堀口純子『日本語教育と会話分析』くろしお出版 1997年）が，私は自然言語における会話分析の成果をどのように教材としての「会話」に反映させるかについて，教材開発の面で，より踏み込んだ議論ができるだろうと考えている。また，メタ言語でもある教科書の「会話」は，もっと多角的に検討される必要があるとも思っている。機会を改めて論じたいと思う。

際的な領域に進まざるをえないのも理解できる。しかし，結論を急ぐのは，危険であるし，必要もないのではないか。既に述べた通り，当該の専門分野において多様な議論があるテーマに性急に結論めいたことを付与することには慎重になるべきだと思う。議論そのものが矮小化するか抽象的な一般論になりかねないからである。

ある論文[19]は，エスノメソドロジーからD・ハイムズの「人類学的方法」を概観し，あいづちとうなずきを，メイナードの「自己コンテクスト化」とヴィゴツキーを指標にして分析している。そして，「まとめ」として，社会・文化的な意味付けが以下のようになされている。「人間関係の調和におもきをおき，社会を構成する一員として個人が定義される日本文化がこのような仕組を支えていると考えられ」，また，「このようなコミュニケーションの習慣が日本人の思考パターンとして内在化しているとすると，日本人としてのコミュニケーションの習慣を次世代を担う子供達が身につけていくこと自体が人間関係指向の日本文化が伝承されていくということになる」。あいづちとうなずきを分析して，こういう結論を引き出してきたところで，何がわかるわけでもないだろう。ましてや，分析者がとらわれている支配文化に無自覚であり，歴史文化的な前提に無批判であることを露呈しているという点では，滑稽でさえある。

問題となるのは関連諸科学の包括的な知識ばかりではない。現象学的社会学などの研究史における，人々の日常世界や生活世界から科学がいかに「生ける現実」のダイナミズムをすくい出すかという，根元的な問いを軽視してはならない。エスノメソドロジーの会話分析からその問いかけを外すことは決してできない。また，その問いかけを通奏低音に持つ研究は実証主義，科学主義に懐疑的であり，人間や文化の逸脱した部分，あいまいさ，さらには醜さを研究領域から捨象することはないし，できないのだという議論[20]を，私たちは確認する必要があろう。また，会話分析のみなら

19) 喜多壮太郎「あいづちとうなずきからみた日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』明治書院　1996年1月号　vol. 15 所収

ず「生ける現実」に踏み込もうとする学問的な営為は，分析者の社会的，思想的位置を浮き彫りにせずにはおかない。この分野において，実証に基づく科学主義は，研究者によって選択されたひとつの政治的態度であり，研究者に状況超越的な安全な位置を保証するものではないことも確認しておいていいだろう。そしてそれは，もはや日本語・日本人を今日的に語る場合にも，政治的に透明な位置はあり得ないのだという酒井直樹や安田敏朗の主張[21]と響き合うものであることをも確認しておきたいと思う。

会話分析を扱った論文を，もう一点取り上げておこう。「談話の姿を記述することを目指す」中田智子の論文[22]は，談話を「ことばによるはたらきかけのやりとり」ととらえて，その機能を担う最小単位である move が発話の中でどのような特徴的パターンやヴァリエーションをもって現れるかを「観察することによって，談話の姿をより精密に記述することができる」とするものである。また，その方法を他言語の談話資料にも用いて比較対照すれば，「『言語間におけるコミュニケーションの方策の違い』などと言われてきたものが，実際にはどのような内容を持ち，どこが異なるのかを具体的に示すこともできる」として，メイナードと同様に談話の対照研究に向けた展望を示す。発話行為を分析の基軸とする議論は，オースティン (Austin) やサール (Searle) らの，「具体的な発話より抽象的なレベル」における「(発話)行為としての典型的な性格を述べることが目的となっている」研究を超えて，「実際の談話に現れる発話の分析を目標」とし，「その出発点となる特徴分類枠」の作成を目指すものである。「哀願する，ことばをにごす」等の発話行為に関連のある 181 語の日本語の動詞・連語の，それぞれの語の持つ発話行為的な機能を抽出・整理する作業

20) P・K・ファイヤアーベント 『方法への挑戦』村上陽一郎・渡辺博訳 新曜社 1981 年。M・フーコー 『狂気の歴史』田村淑訳 新潮社 1975 年を参照

21) 酒井直樹 『死産される日本語・日本人』新曜社 1996 年。安田敏朗『帝国日本の言語編制』世織書房 1997 年

22) 中田智子 「発話分析の観点――多角的な特徴記述のために」国立国語研究所報告 103 研究報告集 12 1991 年

を経た上で，発話行為の場における発話の分析枠組となる6つの軸[23]に沿ってその機能を分析し，分類項目リストを提示する。精緻な中田の分析をここで詳細に検討する余裕はないが，「今後の課題」としてあげられた問題点は，中田のそれまでの議論における分析枠組みを大きく踏み越すものと思われる[24]。

実際のことばのやりとりで交わされる情報が言語構造や談話構造のみでとらえきれないことは先述した通りである。また，会話分析がいまだ発展途上の方法論であることも周知であろう。最後に，好井裕明の会話分析実践者の宣言ともとれる主張を，共感を持って引用しておきたいと思う。

> 会話分析は，会話を対象とする。言語を媒介とするコミュニケーションの構造と過程を対象とする。だが，それは“書かれた言語”にせよ“話された言語”にせよ，言語という体系に収斂していく言語学でもないし語用論でもない。まして，会話という現象を個人の心理過程に還元させていく心理学でもない。会話分析の発想や具体的記述は，「○○学」，「○○論」ではおさまりきらないものだ。私自身も，明快にこれだと述べることは難しい。だが，1つだけ確実に言えることがある。会話分析とは，会話というきわめて日常的な秩序構成現象から出発し，そこで人びとが何をしているのかを詳細に見直すことで，人びとの間にはりめぐらされた微細であるが強力な，そして普段そのなかに浮遊しているが，浮遊していること自体，人びとに見えていない権力関係の具体的な様相，権力作用の具体的な痕跡を描き出そうとする，1つの「言語ゲーム」(後期ヴィトゲンシュタインの重要なテー

23) 1誘発要因　2話し手・聞き手，および両者の関係　3はたらきかけの仕方　4述べられる命題の種類　5談話の他の発話との関わり方　6その他，発話の「場」を形成する要因。 中田智子　同上論文。

24) 例えば，単なる「標本づくり」ではない，記述の道具としての「分類」の確立とその有効性を説く一方で，発話のダイナミズムを相互的に生産する「場」の動態的記述，及び，「複数の機能を同時に担う発話」や「3人以上の参加者による談話」の記述の必要性と難しさを挙げている(中田智子　同上論文)が，発話により「実際には何が行われているのか，また，行われたのか」という次元に踏み込むほど，発話の「姿」は固定化を阻むと思われる。

マの一環　引用者注)であり「現実を差異化していく言説」だ，ということである[25)]。

25)　好井裕明「会話分析」木下富雄・吉田民人編『記号と情報の行動科学』福村出版　1994年所収